＆　　：

日系宗教の棲み分けとエピデミック化

国立民族学博物館　　中　牧　弘　允

日本の宗教は海外移住した日本人のあとを追うように新世界のハワイ、北米、南米へと伝播した。そこでは仏教が一部分的には神道も一、キリスト教－北米のプロテスタント、南米のカトリックーとともに日系社会の精神的支柱の一つとして公的行事の宗教的機能を象徴的に二分した。とはいえ仏教やキリスト教は日本人や日系人の通過儀礼や年中行事の執行をとおして主要なマーケットシェアを確保しつづけた。他方、新宗教や霊能者は「貧病争」のような問題に親身になって対応し、その解決をはかることでニッチに食い込んだ。こうした構図は棲み分けのパラダイムとして図示できる。

しかし、日本の新宗教は「日本的なるもの」の枠を超え、非日系人を主たる対象にすえた伝道を推進し、新しい市場を開拓した。そこでは多言語化、多文化化、ハイブリッド化、多国籍化などの戦略が功を奏し、多数の信者が現地でリクルートされた。とはいえリーダーシップは日本人／日系人に掌握され、日本の教団本部とのヒエラルキーが優先された。こうした現象は「エピデミック化」の概念で説明することができる。

問題はグローバル化の過程で二つのモデルがどう変容するかである。

，

，

‘　　，